

【表現学関連分野の研究動向】

日本語文法(現代)

早津 恵美子

2000年に「日本語文法研究の進展と研究者の育成」(会則第2条)を目的として日本語文法学会が創立された。1963年創立の表現学会と違い若い学会だが、2020年9月刊行の学会誌『日本語文法』(20巻2号)において「創立20周年記念特集 日本語文法研究のこれから」が組まれた。20巻1号には初代会長仁田義雄氏による文章「日本語文法学会が創立された頃」があり、国語学会(現、日本語学会)とは別に日本語文法学会が創立された経緯が日本語研究の歴史や当時の状況とともに述べられている。国語ではなく個別言語のひとつとしての日本語を諸言語の個別言語学の成果に学んで研究する必要性の認識もこの学会の創立に向かわせたひとつだという。創刊号の投稿案内には、投稿原稿の分野として、現代語・古典語・方言の日本語文法及び関連領域(生成文法、認知言語学、日本語教育、文章・テキスト論等16種)とされており、文法を中心としつつも多様な領域の研究の交流の場となることが志向されていたことも窺える。この20年間の日本語文法研究は、上のいずれにおいても着実に進んでいる。

諸言語の個別研究との対照を試みた2020年の成果として、プラシャント・パルデシ・堀江薫編『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』(ひつじ書房)がある。日本語とアジア・アフリカの諸言語についての26編の論考によって連体修飾構造の多様な様相が示されており、日本語の分析に手がかりや新しい視点を与えてくれる。

研究領域の幅は上述の特集号の論文に窺える。上山あゆみ「これからの生成文法研究」は、20世紀に日本語についても盛んであった生成文法研究が現在やや勢いを失っているとしたうえで、その「遺産」を生かしつつ従来の意味論を超える方法論として氏の提唱する統語意味論を紹介する。機能語や動詞の項構造の記述において統語意味論の分析は興味深い。小西いずみ「終助詞が表す意味とはどのようなものか」は、終助詞を方言間で対照することにより、基本的意味と拡張的用法、認識の意味と伝達的特性(独話か対話か)の関係が探られる。共通語の終助詞や他の品詞の研究においても示唆的な観点である。前田直子「条件表現4形式使い分けルールの簡略化」は、「と、ば、たら、なら」の研究成果が日本語教育に必ずしも生かされていないとし、母語話者の作例とコーパス調査に基づいて各形式に特徴的な用法を見出して教育における簡略な説明を提案する。文法の研究と教育の交渉の重要性が実感される。宮地朝子「副助詞類の史的展開をどうみるか」では、中世以来の「体言」という捉え方を導入して副助詞ダケ等の文法変化を観察することによって、一般言語学でいわれる、語 word > 接語 clitic > 接辞 affix という方向とは異なる、接辞 > 接語という変化が見出され、一般言語学への貢献となっている。

現代日本語の・共通語の・文法の研究といっても、他言語や古典語や方言の研究、文法以外の領域の研究への目配りとそこからの学びを積み重ねてこそ豊かな実りがもたらされるのだろう。竹田晃子『東北方言における述部文法形式』(ひつじ書房)、池上嘉彦・山梨正明編『認知言語学 I』(ひつじ書房)もそれに気づかせてくれる。(名古屋外国語大学)